

平成18年度資源評価票(ダイジェスト版)

標準和名 ヒラメ

学名 *Paralichthys olivaceus*

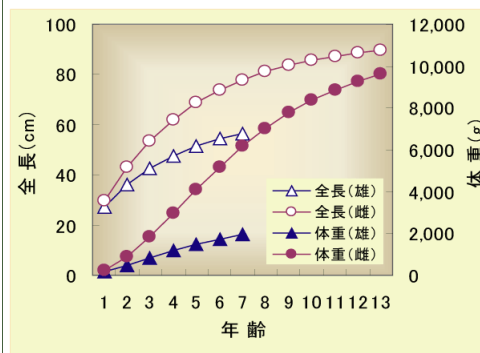
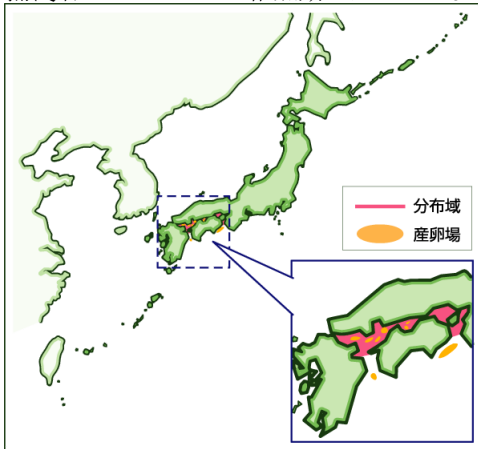
系群名 瀬戸内海系群

担当水研 瀬戸内海区水産研究所



生物学的特性

寿命: 15歳程度
成熟開始年齢: 2歳(雄50%、雌80%)、3歳以上(100%)
産卵期・産卵場: 東部海域は2～5月、中西部海域は3～6月
索餌期・索餌場: ほぼ周年、瀬戸内海全域、紀伊水道、豊後水道及び四国の太平洋沿岸域
食性: 着底後の稚魚は主にアミ類、仔魚等、成長に伴い魚食性に移行
捕食者: 稚魚期にはマゴチなどの大型魚

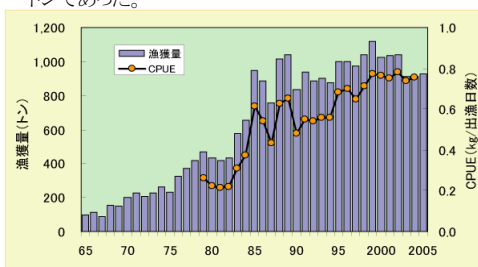


漁業の特徴

主に小型底びき網、刺網、定置網、釣によって、秋に未成魚、冬～春季に成魚を主に漁獲している。2004年では漁獲量の64%が小型底びき網漁業によるもので、小型底びき網では小型魚も多く漁獲されている。

漁獲の動向

漁獲量は1970年代前半までは200トン前後であったが、1970年代後半～1980年代に増加し、1988年には1,000トンを超えた。その後漁獲量は横ばいで、800～1,000トン台を推移している。2004年は911トン、2005年は概数値で929トンであった。

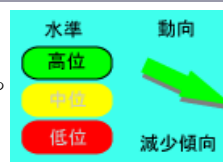


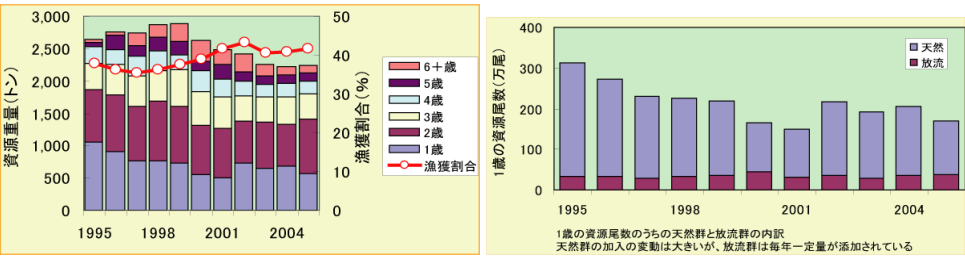
資源評価法

1995～2005年の年別年齢別漁獲尾数データを使用し、コホート解析を行った。解析では、6歳以上をプラスグループとし、5歳と6+歳の漁獲係数が等しく、2005年の1～5歳の漁獲係数は過去3年間の平均に等しいと仮定した。コホート解析結果の年別年齢別資源尾数に加え、漁獲量とCPUEの推移、燧灘沿岸の愛媛県河原津、香川県大浜におけるソリネットによる稚魚着底量調査結果を使用し資源評価を行った。

資源状態

漁獲量とCPUEの推移から資源水準は高位と判断した。コホート解析の結果、資源量は1995年以降2,000～3,000トンの間を推移しており、2005年は2,232トンだった。2000年と2001年の加入量の減少により、近年高齢魚が減少していることから、動向は減少と判断した。現在のFはF30%を大きく上回っているものの、加入量が経年的に減少する傾向は見られない。また、燧灘における2006年6月のピーク時の稚魚着底量は、2005年の水準を上回っており、2007年の加入量は2005年を上回ると予想される。放流魚の添加効率は0.07～0.11で、毎年1歳の天然群に約35万尾が添加される。





管理方策

資源が高水準であるため、現在の水準維持を管理目標とした。ABC算定のための基本規則1－3)－(2)に基づきABCを算定した。資源管理基準は、2006～2011年の資源水準を維持するF (Fsus)とし、Flimit＝Fsusの時の漁獲量をABClimitとした。ABCtargetの算出にあたり、RPSが低位で連続した場合を想定した状況下での資源水準を維持するFを推定した。このときのFがFsusの約0.9倍であったことから、Ftarget＝0.9Fsusとした。

	2007年漁獲量	管理基準	F値	漁獲割合
ABClimit	863トン	Fsus	0.83	41%
ABCtarget	796トン	0.9Fsus	0.74	38%

- 漁獲割合はABC／資源量
- F値は選択率が1.0となる年齢の漁獲係数

資源評価のまとめ

- 資源水準は高位で推移している
- 2000年と2001年の加入量の減少に伴い、近年高齢魚が減少傾向である
- 稚魚着底量調査結果より、2007年の加入量は2005年の水準を上回ると予想される
- 種苗放流魚の添加効率は0.07～0.11で、毎年1歳の天然群に約35万尾が添加されている

管理方策のまとめ

- 現在の資源水準を維持することが管理目標
- 小型魚の漁獲圧が高いため、再放流や禁漁区の設定など引き続き小型魚保護の方策の実施、検討が必要
- 漁獲圧と種苗放流数の両方を考慮した管理方策の検討が必要

資源評価は毎年更新されます。